

鞍馬獅子 (夫婦酒替ぬ中仲)

へ嵐の誘ふ花の雪 散れば狂じて柳髪 へ雪は飛んで散乱し 羽風に似たる白妙も くるう狂女の姿かや

へその人に物問う妾が尋ぬる公達の

へ綾の狩衣たをやかに 十六七の細眉に へかね黒々と粧いし お稚児の旅に逢うことの 若しやちらりと三日月ならば 教へてたべの里人と へうつつ涙にわけもなき

へヤ、何ぢやわが君様は鞍馬にぢや

へ鞍馬の里は八瀬大原 大原木可愛く 大原女が 引く牛に 恋しき人をうちのせて 引いて行きましょわが故郷へ

大原木可愛く 大原木可愛な 可愛いくと鳴く鳥に 憎や添寝をおこした

へホ、ホ、ホ、可笑しいち足早う逃げていたかわらへく

へ妾も人が笑はなん さもし恥かしこの姿 小春へ残る乱れ菊 とりなりうつす水鏡 へみもすそ川や 八十瀬川 所は伊勢の神 神風につれて聞こゆる神楽歌

へ悪魔を払ってそつこでせい

へ諸国めぐりに 天照す 神を商ふすぎはいに 襟に掛けたる曲太鼓頭に獅子の二人まへ 一つによせて 打ったり舞うたり 月のついたち十五日 へ大晦日も元日も 股引がけの旅神楽 へわれと浮かる道草に獅子の真似して 来りける

へコレコレ里人こゝ来てたもや

へ太神楽はそばへ寄り

へイヨー見ればお若い女中の唯一人 お前方の様な美しいお方のそばへよつたならや どんな太鼓の撥があたらうもしれぬ

へコレく 其方の背負うて居やるはそりや何ぢや

へエこれかへ こりや獅子さ

へその獅子わらはに貸してたも

へエこれを貸して呉れえ

これをお前に上げてはわしの鼻の下が干上がる

へそんならわが身舞うて見や

へ合点がてんお望みに任せつさらば神楽を離さうか

へそもく 神楽のその初め 天の岩戸の屏風の内の 天のうづめの魂騰に 神の 心をとりはやし 手練手管の真実に へ柁木のかづらよりかけて 枝垂かづら玉かづらながなき鳥の常闇に しつぽり汗を角兵衛獅子 へ獅子はお家のてれつくでん つくづく見れば てんとたまらぬ品物

め へ誰にころの乱髪 どの岩戸の睦言を 問はまほしやと寄添へば
へもとより狂気のうろく と 長刀取つて打ちかゝる へおつとあぶない
鼻の先 へ受ける曲撥三尺の 劔にひやす業物はこれぞ千卷の玉鉾に
へ追立てられて太神楽 逃げる拍子に狂う獅子 こなたは恋の物狂
い へ狂うは獅子の冬牡丹 獅子とらでんの どうくとも あはで果なん
へわが夫の鞍馬の方と聞くものを 鞍馬の方はいづくぞと へそこはか
となく 走れば走るうつゝなき 止むる男を振袖に 払ふ羽袖やひるがへ
る へ賤の小田巻繰返し 昔を今に恋しさの へ恋には翼もあるものを
添うてゆきたや逢はせと 口説いつ泣いつ正体なく へ取継られて
太神楽 乗りかゝつたる灘の舟寄辺兼にし風情なり。